

ホーフマンスタールのハーン受容

孟 真理

Zur Hearn-Rezeption bei Hugo von Hofmannsthal

MOH Mari

要 旨

ホーフマンスタールは、古今東西の著作から得た膨大な教養や示唆を咀嚼し、自らの思考のなかに自在に取り込んでいくことに長けた知性の持ち主であった。本稿では、彼のラフカディオ・ハーンの著作（とりわけ『心』）との出会い、共感、再読、深化と読替えの過程に着目することにより、ホーフマンスタールがハーンの何に惹かれ、どのように影響を受けたのかを考察する。ホーフマンスタールは、越境者ハーンが日本文化を見つめる愛にみちたまざしから、境界を越えて異質なものと身を投じること、心の目で捉えることで異質なものを身近なものへと変容させること、また、外からの視線で自文化を見つめ直すことを教えられる。さらに彼は、ハーンから学んだ異文化との交わりの姿勢や示唆を、自身の問題意識や創作原理に沿って読み替える。ハーンにおける地理的・文化的な越境の問題は、ホーフマンスタールにおいては、認識言語の限界や自我の境界線をいかにして踏み越えるかという、彼自身の課題とも結びつけられる。それがひるがえって仏教的な概念への関心にもつながっていったのである。

キーワード：ホーフマンスタール、ハーン、越境者、言語危機

Abstract

Hofmannsthal ist für seine kreative Belesenheit bekannt. Er setzt im Prozess der Lektüre Aneignung, Verarbeitung und Re-lecture dialogisch fort. Das können wir auch an seiner Begegnung mit Lafcadio Hearn's *Kokoro* feststellen. Die Daseinsform Hearn's als Grenzgänger und seine Wahrnehmungsweise beim Umgang mit dem Fremden haben Hofmannsthal sehr angeregt und zu seiner vielschichtigen Auseinandersetzung mit Hearn geführt. Wie man in die fremde Kultur hinübergeht, wie man mit den Augen des Herzens das Fremdartige ins Vertraute umwandelt, und wie man mit dem fremden Blick das Eigene kritisch ansieht, hat Hofmannsthal maßgeblich von Hearn's Schriften gelernt. Wir werden sehen, wie Hofmannsthal die Anregungen von Hearn in sein eigenes Werk hineingezogen hat. Er versucht Hearn's Ansätze zur geographisch-kulturellen Ferne mit seiner eigenen poetologischen Fragestellung zu verbinden und damit die Möglichkeit der Grenzüberschreitung der sprachlichen Erkenntnis zu erkennen. Seine Suche nach einer andersartigen Sprache, mit der die Krise des Subjekts zu überwinden ist, führt ihn zum Interesse an der buddhistischen Idee der vielfältigen Seele. Es ist gerade in diesem Gedankengang, dass Hearn's Japanbild als Symbol des fernen Ideals eine gewisse Rolle spielt.

Keywords: Hofmannsthal, Hearn, Grenzgänger, Sprachkrise

1 序

1902年、ラフカディオ・ハーンの『心』 *Kokoro* (1896) を英文原書で読んだホーフマンスタールは、友人宛ての書簡で「この冬の間、この書は多くの喜びを、考えるための多くの素材を、そして感情・認識・共感によって開かれうる大きな世界に私たちは住んでいるのだという、ある種の拡大された感情を与えてくれました」¹⁾ と述べて、一読を薦めている。この記述は、その後のホーフマンスタールのハーンとの、そしてとりわけ『心』との持続的な関係をすでに予見していたかのようだ。ホーフマンスタールがこの書物から受け取ったのは、「考えるための…素材」だけではなかった。ハーンが(また読者が)対象にアプローチする際の「感情・認識・共感」が、ひとつの「大きな世界」を開き、しかもそこを「私たち(が)住んでいる」世界としてくれることへの感慨があり、また、そのような対象認識の方法に対する彼自身の創作者としての関心も、表明されているようである。

『心』を読んでまもない1902年6月、ホーフマンスタールは『若きヨーロッパ人と日本の貴人との対話』(以下『日本人との対話』と略記)を構想したが、これは覚書のみで未完に終わった。1904年秋のハーンの訃報に接して彼が寄せた追悼文は、ドイツ語版ハーン選集の劈頭を飾ることになり、ドイツ語圏におけるハーン受容の格好の導きとしての役割を果たすことになった。ホーフマンスタール自身、その後も折に触れてハーンに言及している。のちにはハーンの仏教エッセイを手がかりにした独自の概念をもって自作を解釈し、また第一次世界大戦期には、ヨーロッパの危機に対する処方箋を東アジア思想に見いだそうとして、ハーンを読み直してもいる。

ヴァルター・パッヘによるとホーフマンスタールのハーン受容は、初期の「印象主義的」日本像の愛好とともに始まり、次第に「極東の哲学」との対峙へと思想的に深化していったが²⁾、その際ほとんどいつも中心に置かれていたのが『心』であった。この小さな書物がホーフマンスタールに持続的に影響し続けたのは、なぜだったのだろうか。本稿では、初読以来繰り返し口にされてきた『心』への共感の底にあったものがいったい何だったのかを、ホーフマンスタールの作品や発言から読み解いていきたい。

1) Brief an Georg von Franckenstein am 27. Juli 1902. In: Hugo von Hofmannsthal: *Sämtliche Werke. Kritische Ausgabe*. Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag) 1975-2022, Bd. 33, S. 333. 以下、批判版ホーフマンスタール全集(SW)からの引用は巻とページをSW33, 333のように略記する。ホーフマンスタールのテキストの邦訳は筆者によるが、既訳のあるものについては、それを参照させていただいた。また、必要に応じて文中に原語等を [] で付記する。

2) Walter Pache: *Das alte und das neue Japan. Lafcadio Hearn und Hugo von Hofmannsthal*. In: *DVjs* 67.3, (1993.9), S. 450.

2 ドイツ語圏のハーン受容

まず、世紀転換期のハーン受容の状況をごく簡単に確認しておこう。周知のように、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、ギリシャとアイルランドにルーツを持つ英国人である。1890年に米国ジャーナリストとして来日したのち、英語教師となって日本に定住・帰化した。日本での文筆活動としては、『知られざる日本の面影』 *Glimpms of Unfamililar Japan* を皮切りに、随筆、紀行文、文化論、短編小説、再話文学等からなる著作13冊を残している。これらの書物の刊行は1894年から1904年に亡くなるまでの10年間であり、ちょうど日清・日露戦争によって日本が国際舞台に登場した時期にあたる。半世紀前の日本の開国以来、西洋では各地の万国博覧会を機に日本ブームの波が押し寄せ、それとともに日本文化の受容も成熟し、大衆にもすでに広まっていた。そこに今や、急速に近代化を遂げていく新興軍事国としての日本に対する関心が増加することになったのである。ハーンの仕事は、この二重の関心によく適合するものだったと言える。英米での受容に続き、彼の死と前後してフランス語、ドイツ語、オランダ語などにも翻訳された。ドイツ語圏では、ホーフマンスタールの序文を付した1905年の『心』³⁾を皮切りに6巻のドイツ語版ハーン著作集が出版され、木版画家エミール・オルリックによる分離派様式の美しい装丁もあいまって大いに好評を博した。

ハーンの仕事がドイツ語圏の一般読者にどう受け止められたのかをよく示しているのが、この著作集刊行後に編まれたハーン名文選『日本の書』（1911）の序として置かれたシュテファン・ツヴァイクの紹介文《ラフカディオ・ハーン》⁴⁾である。

自ら日本を体験することのできなかった人々、言葉にならない、憧れに満ちた好奇心で、イメージを求め、日本美術の優美な装飾品をうっとりとして手に取り、いくつかの事実のぐらつく足場から、遠い国の色鮮やかな夢を組み立てようとする人々、そうした多くの人々にとって、ラフカディオ・ハーンは比類のない助力者にして友となった。（中略）彼は最初にして最後の人として、われわれに対しても、また不安を抱かせるほどの速さで変容していく今日の日本に対しても、古きニッポンの夢を書き留めてくれた。 (S. 1)

ハーンの仕事は、もはやペンで書かれたものではなく、日本人のつかう細筆で精緻に描かれたもののように感じられる。（中略）これらの短編小説を読むと、日本美術の最も優れた宝であるあの色鮮やかな木版画（中略）を思い出さずにはいられない。 (S. 8)

もちろんすでに当時、彼にとっての日本の傍らでもうひとつ別の日本が興隆していた。ダイナマイトを製造し魚雷艇を建造して戦争の準備を整えた日本、あまりに速くヨーロッパ

3) Lafcadio Hearn: *Kokoro. Einblicke in das Innenleben Japans*, übersetzt von Bertha Franzos, Frankfurt a. M. (Rütten & Loening) 1905.

4) Stefan Zweig: „Lafcadio Hearn“. In: Lafcadio Hearn: *Das Japanbuch. Eine Auswahl aus den Werken*. Frankfurt a. M. (Rütten & Loening) 1921, S. 1-12.

になろうとする貪欲な日本が育っていた。だが彼はそれについて語る必要はなかった。大砲の音でそれは自ずと知れたからだ。(S.9)

ツヴァイクは、ハーンの手書が、ジャポニズムの流行によって生まれた「遠い国の色鮮やかな夢」を満たしてくれるものであったこと、西洋人の手になるものでありながら、エキゾチックな日本美術品のように受け止められたことを、ふんだんな比喻を用いて描いている⁵⁾。しかし現実の日本は、人々が好んで読み取ろうとした「古きニッポンの夢」とはかけ離れたものになりつつあった。ハーンの手書はその「最後の」目撃者の証言として、「変容していく今日の日本」の姿の裏返しの報告書ともなっている。

ハーンの日本像が客観性に欠け、日本礼賛と西洋批判に傾いていることは、同時代の日本学者の批判の種ともなった。たとえば日本学の泰斗バジル・ホール・チェンバレンは当初ハーンを高く評価していたが、のちに『日本事物誌』第6版(1939)では、ハーンが描いたのは「彼が見たと思っている想像の日本」でしかなく「空想の中」にしか存在しないと酷評している⁶⁾。1930年代以降、「美しい夢の国」の需要がなくなるとともに、ハーンは西洋においては顧みられなくなる。一方日本では1920年代に彼の作品が日本語訳されて以来、小泉八雲は、日本の理解者にして好意的な紹介者として、現在に至るまで揺るぎない地位を占めている。

以上のように、ハーンの手書は主観的色彩に彩られたものであったが、ドイツ語圏におけるハーン愛好の火付け役でもあったホーフマンスタールは、彼の手書を高く評価しつづけている。それはなぜだったのだろうか。本稿では、その理由を読み解き、まさにその主観性こそがホーフマンスタールを引きつけた要因のひとつともなっていたことを明らかにしていきたい。次節以降見ていくように、彼はハーンの手書に深く共感しつつも、日本文化礼賛の視点からは比較的早く脱してしまう。むしろ、ハーンの手書を彼自身の文学的・文明的課題に引き寄せて読み替え、ハーンが提示してくれる可能性に感応し、また応答していくのである。

3 《追悼文》のハーン像——言語危機の文脈

ホーフマンスタールは1904年始めにも『心』を再読し、さらに夏にかけてハーンのいくつかの著作を読んだ⁷⁾。その年の秋にハーンは54歳で亡くなっている。前述したようにホーフマンスタールによる『心』序文は、ハーンの手報に接して記した追悼文《ラフカディオ・ハー

5) ヒューズは、日本の開国以降、日本について英語で書かれた数多くの手書のなかで、ハーンの手書が好評を博したのは、いくつかの理由があるという。彼は、ハーンが旅行者や学者のような外部の目でなく、定住者のまなざしで日常生活を捉えたこと、ヨーロッパ人の西洋懐疑の中で願望像が投影されたこと、ジャポニズムの流行の中で日本の美術品のように受容されたことの3点をあげている。ジョージ・ヒューズ『ハーンの手書の中で』研究社 2002年、82頁。なお、本稿では「ジャポニズム」は、ジャポネズリ(異国趣味としての日本愛好)の段階も含む広義で用いている。また、世紀転換期のウィーンの文学・芸術におけるジャポニズムを多角的に捉えた論考としては、西村雅樹『世紀末ウィーン探究——異との関わり』晃洋書房 2009年および、同『世紀末ウィーンの知の光景』鳥影社 2017年。

6) チェンバレン『日本事物誌 第2巻』平凡社 1969年、5頁以下。

7) SW33, 331.

ン⁸⁾の再掲である(以下《追悼文》と表記する)。ごく短い文章だが、通り一遍の紹介にはとどまっていない。そこには彼がハーンから受けた文学的・思想的刺激の要諦がはっきりと示されている。

《追悼文》は、まずハーンの死の知らせにうけた衝撃から語り起こし、敬愛に満ちたトーンで、ハーンの功績をたたえる。

日本はその養子を失ってしまった。(中略)この異国の人、日本をかくも愛した移住者も亡くなったのだ。これほどに日本を知り愛したヨーロッパ人は他にいなかったかもしれない。審美家の愛とも学者の愛とも違う、より強く包括的な、世にもまれな愛、愛する国の内面生活を共に生きた愛をもってである。彼の目の前のものすべてが美しかった、なぜならそれは内から、生の息吹によって満たされていたからである。(SW33, 53)

ホーフマンスタールのこの文は、基本的にはハーン自身の言葉をなぞり、その残響をすくい取るようにして編まれている。たとえば「愛する国の内面生活を共に生きた」は、『心』の副題 *Hints and Echoes of Japanese Inner Life* を敷衍した表現である。外からの観察者ではなく「内から」の生活者のまなざしをもって「愛する国の内面生活」を描くことは、ハーン自身が標榜していたことであり、彼の書物が欧米読者に好評をもって受け入れられた理由でもあった。

ホーフマンスタールがそこに介在する「愛」をとりわけ強調していることにも注目しておく。「愛」のまなざしで捉えたものに命が吹き込まれ、だからこそ「すべてが美しかった」という評もまた、ハーン自身が自らの方法論として述べたことがらを想起させさせる。ホーフマンスタールはここで、ハーンの別のテキストを仄めかしているようである。『私の畑の落穂』(1895)の一章《京都紀行》の末尾で「愛」に言及している箇所を引いてみたい。ハーンは、京都郊外の小村で目にした、ひなびた木造家屋の美しさを描写したのち、次のような文章でこの章を締めくくっている。

よろずの国、おしなべて、おそらくこの世を美しくするものは、すべてみなこうしたものであろう。人間と自然、これを喜びをもって眺めるためには、われわれは、主観的にも客観的にもすべてまぼろしを通して [through illusion] 見なければならぬ。それがどんなふうに見えるかは、ひとえに、われわれの心境一つにかかっている。とはいうものの、じつは現実も非現実も、本来は、ひとしくこれ、まぼろしなのだ。(中略)されば、この世に生まれてから死ぬまで、いつも心の美しい霧を通して物を見ている [see through some beautiful haze of the soul] 人こそ、いちばんの幸福人だ。——とりわけ愛の霧 [haze of love] を通して見ている人こそ、いちばんの幸福人だ、愛の霧こそは、日本の国の真昼の白光のように、つまらぬものをも黄金に変えてくれる。⁹⁾

8) SW33, 53-55. „Lafcadio Hearn. Geschrieben unter dem Eindruck von Lafcadio Hearn's im Herbst 1904 erfolgten Tode.“ 初出はウィーンの日刊紙 *Die Zeit*, Wien, 2.10.1904.

ハーンは、「心 [soul] の美しい霧」「愛の霧」によって、日常のありふれたものが黄金の輝きをおびるといふ。このように「まぼろしを通して」事物の本質を捉えることを、彼は自身の対象認識と再現の方法として意識的に選びとっている。この一節によってハーンの短文は、単なる旅のスケッチにはとどまらず、ひとつの方法論的マニフェストとなっていると言えよう。それは、内なる目をもってあらかじめ感知した日本像を、生きた具体的情景を通じて浮かび上がらせるという方法である。この方法が目ざすのが客観的事実性ではなく、むしろ主観的な真実性であることもまた明らかだろう。ジャポニズムが夢見たものの再生産ではなく、体験のリアリティこそがこのイメージの鮮烈さを作り上げている。

『心』に目を向けると、15章からなる書物の全体構成にも、また個々の章にも、同様の構成原理が見て取れる。15の章は、短編小説的なエピソードを中心にした短い章と、文化論的考察を軸にしたやや長めの章が、おおむね交互に配置され、ゆるやかな全体構成をなしている。また各章も小さなエピソードを具体的な例示として、日本人の「内面生活」を多方面から洞察していく。たとえば《追悼文》中でも言及されている《停車場にて》と《業の力》のふたつの章を見てみよう。

『心』冒頭の章《停車場にて》は、刑事に伴われて護送中の殺人犯が、群衆の見守る中で被害者の妻子と対面し、刑事に諭されて涙を流してわびる場面を描いたスケッチ風の掌編であり、その締めくくりには、日本人の心性についての短い考察が付け加えられている。ホーフマンスタールはこの小品について、「ほとんど取るに足りない逸話、センチメンタルなところなきにしもあらずの逸話」だが「書くすべを心得た人によって書かれた、しかも感じるすべを心得た人によってあらかじめ感じられた」(SW33, 54) ものだと評している。「あらかじめ [vorher] 感じられた」の一語は、ハーンがこのエピソードを自らの主観の枠組み、つまり「まぼろし」のフィルターをとおして解釈していることを指している。

ただしこの章に関しては、ハーンの主観的解釈はホーフマンスタールには「センチメンタル」すぎる、つまり過度に理想化されすぎており、またいささか教訓的すぎると受け止められたのかもしれない。1904年はじめ頃、彼は『逸話』 *Anekdote* と題してこの章を英語からドイツ語に翻訳しているが¹⁰⁾、その際、原文の最後の数段落を削除している。ハーンがこのエピソードをもとに、仏教的な慈愛と正義や日本的父性について考察している部分である。ホーフマンスタールによる独訳版は、この説明的な蛇足部分を切り落としてクライマックスで作品を終わらせることで、短編小説としての緊迫感を高めた佳作へと仕上げられている。ここからは彼がハーンのスケッチの鮮やかさを高く評価していたことも読み取れる。

9) “*Note of a Trip to Kyoto*”. In: Lafcadio Hearn: *Gleanings in Buddha-Field*. 1895 (*The Writings of Lafcadio Hearn*, Vol. 8), Kyoto (Rinsen) 1988, Reprint: originally published: Boston (Houghton Mifflin) 1922, p. 64f. 小泉八雲『仏の畑の落穂 他』平井呈一訳、恒文社 1988年、82頁。ハーンの著作からの引用は原則として既訳を用い、必要に応じて原語を [] で付記する。ただし一部訳語を変更したところがある。なおホーフマンスタールの《追悼文》は直接この旅行記を名指してはいないが、『仏の畑の落穂』の書名をあげており、また「古き日本が…小さな寺のある片田舎の村々にある」(SW33, 53) 等の記述も見られる (SW33, 335の注釈による)。

10) SW29, 246-248. この翻訳は生前には発表されていない。

一方、ホーフマンスタール自身は、このエピソードをハーン自身とはやや異なる角度から読んだようだ。覚書『日本人との対話』には、この小品を指すと思われる「懺悔者は子どもに見つめられ、悔恨の情に駆られてひれ伏す」(SW31, 42) という一文がある。ホーフマンスタールはここで、犯人が悔恨をその全身をもって表現している点に焦点をあてている。犯人の身振りや表情、すなわち身体言語の語りに注目し、そこに、人格が身体と心情の一致においてあらわれる例を見いだしているのである¹¹⁾。

一方、『業の力』と題する章は、日本人の多数的霊魂観を西洋的霊魂観と比較した仏教哲学的考察である。ここでは章の最初に注目しておきたい。冒頭に「靈的な記憶のごときもの」(K, 117)¹²⁾ が、たとえば初恋の男女を引き合わせる親和力として働くさまが語られ、「業(カルマ)」や「前世」の概念の導入となっている。小さなエピソードが、読者をなじみのない話題に引き込む効果を上げているのである。このように『心』は、一瞬のリアルな光景を鮮やかに捉える印象主義的なスケッチの冴えと、それを手がかりとした文化論的考察の深まりが相互補完をなしている。ハーンの文章のこうした特徴をホーフマンスタールは高く評価し、以下のように述べている。

それらの思索では、深く捉え難いものが、まるで深い海底から光の中へと運び出され、次々に並べられているかのようだ。私の間違いでなければ、それは哲学だ。しかし私たちが冷たいまま放っておくことはなく、私たちが観念の荒地へ引き込むことはない。だからそれは宗教とも言える。しかし人を脅すことはなく、世界で自分だけが存在すると主張することもなく、魂の重荷にもならない。私はそれを使節と、ある魂から別の魂への友情のこもった使節と呼びたい。(中略) 重苦しさのない、生命に満ちた学問であり、見知らぬ友に宛てた書簡なのだ。(SW33, 55)

「私たちが観念の荒地へ引き込むことはない」哲学、「重苦しさのない…学問」という評価は、ホーフマンスタールの書簡体短編小説『チャンドス書簡』*Ein Brief* (1902) における言語批判を容易に思いおこさせる。ここには、この時期の彼自身の問題意識にあった、概念化する「理性的な言葉」(SW31, 52) への不信と、それとは別様の認識形態および言語表現を模索するさまざまな試みが、投影されているのではないだろうか。

すでに述べたとおり、ホーフマンスタールがハーンの手紙に出会い、それに触発されて『日本人との対話』を構想したのは1902年、まさに『チャンドス書簡』執筆直前の時期であった。両者はともに、当時彼が構想していた作品集『虚構の対話と書簡』*Erfundene Gespräche und Briefe* の一部をなすはずのものだった。つまり、ホーフマンスタールのハーン受容はこの時期の彼自身の文学的・思想的な、また創作論上の問題意識と密接に結びついていたと考えられる。

11) 関根は、ホーフマンスタールと日本の関係を包括的に研究した著書において、この時期のホーフマンスタールが非西洋的身体表現に寄せた関心について、詳細に論じている。関根裕子『黙って踊れ、エレクトラ——ホーフマンスタールの言語危機と日本』春風社 2019年、特に214頁以下。

12) 小泉八雲『心——日本の内面生活がかだまする暗示的諸編』平川祐弘訳(個人完訳小泉八雲コレクション)、河出書房新社 2016年。本書からの引用は、記号 K とページ数で示す。

彼は、言語による合理的認識からの批判的距離化のひとつのモデルを、ハーンの描く日本像にだけでなく、上記のようなハーンの認識の方法にも感じとっていたのであろう。

この連関は、『心』というタイトルに寄せるホーフマンスタールの共感にも見てとれる。《追悼文》のホーフマンスタールは、ハーンの諸作の中でも最も成功を収めた1冊である『心』を「最も美しい本」とたたえ、ハーンが原書扉においた題辞を（引用と明記せずに）独訳してそっくり引いている。

この巻を構成する諸編は、日本の外面生活よりもむしろ内面生活を扱っている、それだから »Kokoro« (»Herz«) という標題のもとにまとめられている。日本の文字で書かれたこの「心」という言葉は、同時に「心意」「精神」「勇氣」「決意」「感情」「情愛」も、そして「内なる意味」をも意味する、ちょうどドイツ語で »das Herz der Dinge« (ものの心、事物の核心) というのと同じである。まさにこの15章にはものの核心があるのだ。

(SW33, 54. 傍点は引用者。)

ホーフマンスタールはここで、ハーンの原文の「英語で」を「ドイツ語で」に置き換えた以外には自身のことばをほとんど加えていない（ただし引用末尾の一文はホーフマンスタールのもの）。この作品が、副題のとおり「日本の内面生活」を通して「ものの心」[the heart of things] を、(つまり真の日本を、内的な真実性を) 捉えた書であるというハーン自身の解題に、全面的に賛同しているのだ。

ハーンが題辞に込めた思いを、ホーフマンスタールがあたかも自分自身の言葉のように引いたのには、それなりの理由があったように思われる。「ものの心」に類似した表現が、ホーフマンスタールの『チャンドス書簡』でも用いられていることに注目したい。

概念言語への不信から失語症に陥った詩人チャンドスは、茫然自失の日々を送っているが、そうした日々の中でたまさか、事物との直接の交歓の至福の瞬間を感受する。それを表現しようような「未知の言葉」(SW31, 54) への予感に震えるという結末に近いくだりに、「心(心臓)で考え」という表現が出てくる。

物言わぬ、ときには生命もないこれらの被造物があふれんばかりの愛をもって、目の前で私に迫ってくるので、幸せに輝く私の目は、まわりのいたるところに生命を見いだすのです。(中略) そのとき私は、私の身体がすべてを解明してくれる暗号だけでできているかのような気がします。あるいは、もしも私たちが心臓で考え始めるなら、私たちの存在全体に対して予感に満ちた新しい関係を持つことができるかのような気がするのです。しかしその特別な魅惑の時が消えると、私はそのことについて何ひとつ語ることはできません。また私と世界全体をひとつに織り合わせている調和がどういふものなのか、そしてその調和をどのように私を感じられるようになったのか、それを理性的な言葉で記述することもできないでしょう、ちょうど私の内臓の体内での運動や私の血液の鬱積について、正確な報告をすることができないのと同様に。

(SW31, 52. 傍点は引用者。)

被造物との「愛」に満ちた関係が対象に生命をもたらし、そして「心（心臓）で考え」ることで「理性的な言葉」では記述できない事物の本質に到達できる可能性、それが「存在全体…との新しい関係」「私と世界全体…の調和」を感受する鍵となりうる。チャンドスのそうした予感がここには語られている。ここで言われていることは、「愛」「心」といったキーワードも含め、ハーンが素朴かつ感覚的な表現で説明していた印象主義的知覚の方法と、通底するところがある。ただしハーンとは異なりホーフマンスタールの場合は、それをより慎重かつ精密に、認識論的葛藤のプロセスとして分析し、表現可能と表現不可能の狭間として言い表そうとしている。ホーフマンスタールにおいては、感覚的陶醉と分析的知性のせめぎ合いが、テキストに二面的相貌を与えている。

また、ハーンにおいては見逃されている「心（心臓）」の臓器としての身体性が、ホーフマンスタールの場合に意識されていることも、あらためて確認しておこう。「身体」や「内臓」や「血液」への言及がそれを示している。この身体性との結びつきは、先に触れたとおり、この時期のホーフマンスタールが、危機の克服と「調和」「全一性」探求の際のひとつの手がかりとしたものであった。

4 《ある保守主義者》への応答

4-1 和魂洋才の系譜

さて、《追悼文》にあらわれるハーン観の際だった特徴をもうひとつ挙げておきたい。ホーフマンスタールは、ハーンの描く日本の情景を、「古い日本」と「新しい日本」の拮抗として提示している。ちなみにこの対比はハーン自身が好んだものでもあり、ハーンのテキストのいたるところに見いだされる。その際忘れてはならないのは、ホーフマンスタールが「古い日本」を、近代化から取り残された田舎のノスタルジックな風景や庶民の素朴な暮らし（「ひなびた村」や「墓地で遊ぶ子供」(SW33, 53)）にだけでなく、まさに「新しい日本」を先導する人々の伝統精神の中に見いだしていることである。たとえば、現在進行中の戦争（ハーンにとっては日清戦争、ホーフマンスタールにとっては日露戦争）が、「太古の死の勇気みなぎる、新進気鋭の大部隊」(53)によって支えられていることが言及される。また、さらにもうひとつ別の戦争として、近代的な商都大阪で丁稚たちが「義務の奴隷」(54)となって立ち働くさまが示される。このように「古い日本」はまだ時代の波に洗われていない場だけでなく、近代化のただ中にあり、まさに伝統的心性こそが近代化の推進力となっているさまが、浮き彫りにされているのである。先に引用したツヴァイクのテキストが新興軍事国日本の実像と対比して強調した、ノスタルジックな「夢の国」の伝達者ハーン、という人口に膾炙したイメージとは、力点の置き方がやや異なっている。単なる「古い美しい日本」のクリシェではなく、近代日本の興隆にとって「古い日本」の精神が果たす役割を映し出していると言える。

こうした日本精神への考察が最も明確に現れているのが、短編小説風の一章《ある保守主義者》“*A Conservative*”である。この章は『心』の15の章のなかでもホーフマンスタールが最もよく言及している章のひとつでもある。彼がこの作品をどう読んだのか、少し詳しく見てみよう。

《ある保守主義者》は、江戸時代末期に武士の息子として生まれた主人公が、長じて西洋の宗教・学問・言語に親しみ洋行するが、そこで物質主義と合理主義に幻滅し、「保守主義者」となって日本に帰国するまでを描いている。主人公はハーンの親しい友人であった雨森信成がモデルと言われているが¹³⁾、物語では雨森の個人史的色合いは排除されており、しかも主人公には名前も与えられていない。この非個人化によって、主人公の葛藤と選択は、いわゆる“和魂”と“洋才”の葛藤として、明治日本の知識人の精神態度のひとつの典型へと高められている。ホーフマンスタールが《追悼文》で「これは短編小説ではなく、政治的洞察である」(SW33, 54)と評しているのも、そうした切り詰め方を示唆しているのであろう。

主人公は留学先で日本に思いを馳せ、外国の文明に接したことによってはじめて、さもなくば理解できなかったであろう自国の価値や美点をはっきり知った、と述懐し、日本がとるべき道に思いをいたす。「日本は今日必要に迫られて(中略)自国の敵である物質文明から多くを採用せねばならぬ」が、それによって「従来からの正邪の観念、義務や名誉の観念を丸ごと投げ捨てねばならぬという道理はな」く、むしろ「西洋に対抗しうるため」に、「古来の日本の中で最良のもの」を保持しなくてはならない、西洋文明からはもっぱら「国民の自衛」「自己発展」に必要・有益なもののみを摂取するべきだ、というのである(K, 151)。つまり、いわゆる“洋才”は、近代化の中で“和魂”が生き延びるための必然として、すなわち国家のための有用性として選びとられる。主人公にとって、西洋文明に学び「外部」のまなざしを獲得したことは、故郷への帰還のための回路と意味づけられているのである。

この主人公の決意は、たとえばドイツ医学・文学を学んだ作家森鷗外が、その劇中の保守的人物に「日本の国家社会で有用の材となるには、和魂洋才でなくては行けません」(『なりのそ』1911年)と述べさせていることを思い起こさせる¹⁴⁾。雨森や鷗外だけでなく、内村鑑三や新渡戸稲造、さらにホーフマンスタールに大きな影響を与えた岡倉覚三(天心)なども、それぞれの仕方で、欧州留学を経て日本回帰を果たしている。主人公はこうした道程をたどった明治の知識人をいわば代表する存在と言える。

ホーフマンスタールは、1902年から1917年まで繰り返し《ある保守主義者》に言及しているが、1917年の講演『ヨーロッパの理念』草稿には、ハーンについて以下の記述がある。

ラファディオ・ハーン。一人のヨーロッパ人の完全な移行。境界を越えること。外人居留地の境を越えるだけでも太平洋を越えるのとほとんど同じである。—いや太平洋の方が両人種の間
の差異ほどは広くない¹⁵⁾。「ある保守主義者」における別な岸辺からの彼の視線。

13) 『心』全体が、この書物の成立に多くの助力をした雨森に献呈されている。このことから、西洋文明にさらされた古い日本精神の帰趨という《ある保守主義者》の主題が、『心』を貫く導きの糸でもあったことがわかる。ちなみに、フランツォス訳のドイツ語版(1905)は、英文原書では10番目に置かれているこの章のみ順番を入れ替えて、1番目においている。理由は不明だが、ドイツ語版冒頭におかれたホーフマンスタールの序文(《追悼文》)と呼応させるためだったのかもしれない。

14) 平川祐弘『和魂洋才の系譜』河出書房新社 1987年、および同「論考 日本回帰の系譜 埋もれた思想家雨森信成」(小泉八雲『心』前掲書Kに所収)を参照。

15) イタリックの部分は英文で、『心』の第8章《趨勢一瞥》からの抜き書きである。

ヨーロッパ、個人主義、機会主義、重商主義に対する嫌悪、アジアへの視線。

(SW34, 327)¹⁶⁾

「別な岸辺からの彼の視線」の「彼」とは、《ある保守主義者》の主人公を指すと同時に、ハーン自身をも指していると考えられる。つまりここでホーフマンスタールは、主人公のうちに東西の狭間に立つ知識階級の日本人青年の一事例を見ているだけでなく、その主人公に重ねるようにして、西洋からの越境者としてのハーンの自画像を読み取っていると言えよう。実際、ハーンはその出生以来、幾度となく文化の狭間に置かれ、文化の境界を越えてきた人物であり、その彼が西洋と日本に向けるまなざしは、見かけほど単純ではなかった。『心』を出版した1896年は彼が日本に帰化した年でもあり、その直前のどちらにも属さないいわば「異人」としてのまなざしで二つの文化を眺めていたのだろう。当時の彼は、神戸居留地の新聞社で勤務しており、この地における東西文化の「著しいコントラスト」(K, 94)を目の当たりにしていた。作品中では、《趨勢一瞥》の西洋文化批判など、西洋的なものへの嫌悪が募るさまがあらわにされているが、他方この時期の私信には、西洋的なものへの嫌悪だけでなく、作品には記されない日本批判も述べられているという¹⁷⁾。

《ある保守主義者》では、こうした「異人」としてのハーン自身の西洋文化批判を、おなじく「外部」の目を持った日本人主人公に代弁させている。読者として想定されているのも西洋人である。そこでは、「別の岸辺」「異なる文化」の回路をとおしてふたつの文化を眺めるまなざしが、幾重にも交錯し重層しているのである¹⁸⁾。ハーン作品は一見すると単純な西洋批判・日本礼賛の二項対立が枠組としてあるように見えるが、実は太平洋を挟んだまなざしの往還がある。そこにはまた、ハーン自身の複雑なアイデンティティ問題も映し出されているといえよう。

4-2 ホーフマンスタール『日本人との対話』から『帰国者の手紙』へ

さて、ホーフマンスタールも1907年、「帰国者」を主人公として、異文化間の葛藤の物語を書いている。5通の手紙からなる書簡体短編小説『帰国者の手紙』は、日本や日本人にはいっさい言及されていないが、ハーンの《ある保守主義者》へのひとつの応答として読むことができるのではないか。『帰国者の手紙』は『心』の影響下に記されたとおぼしき前述の覚書『日本人との対話』(1902)が元になった作品である。覚書では日本(東洋)と西洋の単純な二項対立が核となっていたが、5年後の『帰国者の手紙』では、「帰国」のモチーフの導入によって前述の《ある保守主義者》にも類似した視線の重層化が生じることになる。

まず覚書『日本人との対話』に目を向けておこう。草稿にはハーン『心』の各章の影響が随

16) なお、この箇所の直後では岡倉覚三(天心)の名をあげ、『東洋の理想』から抜き書きをしている。

17) 平川「解説 日本の内面生活解釈者としてのハーン」(K, 292)参照。

18) この点については Pekar が詳しく論じている。Thomas Pekar: *Hofmannsthal's »Umweg über Asien«. Zur Konstellation von Europa und Asien im europäischen »Krisen-Diskurs«*. In: *DVjs* 83 (2009), 246-261; Ders.: *Exotik und Moderne bei Hugo von Hofmannsthal*. In: *Literarische Moderne. Begriff und Phänomen*. Hg. S. Becker / H. Kiesel, Berlin, New York 2007, S. 129-143.

所に見られ、《ある保守主義者》を思わせる箇所も多い。対話に登場する「ヨーロッパについて知悉している老日本人貴族」は、ヨーロッパ文明とヨーロッパ人の生を「不純な錯雑」「混沌」と呼んで厳しく批判し、一方、自分たち日本人には「調和」「全体性」「統一」があると主張する (SW31, 43)。この人物は、ハーンが主人公とした「保守主義者」が西洋に幻滅して帰国したその後の姿を思わせる設定である。とはいえホーフマンスタールは、「調和」の体現たるべきこの日本人貴族の人物像を一人格として具体化するにはいたっておらず、そのためホーフマンスタール自身の西洋文明批判の声が、直接表出してしまっている。

覚書の冒頭には、ホーフマンスタールが後にしばしば引用することになる英語の金言「全人は一斉に動くべし」[The whole man must move at once.] がモットーとして掲げられている。この理想的人間像の具現として「日本人」の「調和」が称揚され、「日本の特性や状況」がいくつかの印象的なイメージ¹⁹⁾とともにあげられている。「我々はコントラストを見る」(SW31, 43) という文中の日本人の言葉のように、西洋と日本(東洋)の対比が目されていたのだろう。つまりこの覚書における「日本」「日本人」は、理想としての「全人」が投影される像であって、批判されるべきヨーロッパを照らし出す「コントラスト」装置にとどまっていた。それゆえの日本文化の過剰な理想化と素朴すぎる二元論が露呈しており、そのままでは作品化できなかったのも当然であろう。

ここからは、ホーフマンスタールがハーン作品から、極東の異国としての日本像そのものへの関心をかき立てられたというよりは、むしろ、ヨーロッパあるいは彼自身を映す「鏡」としての日本像を受け取ったことが見てとれる。いうところの「日本文化の調和」とは、もちろんヨーロッパ的視点の単純な投影である。

その後の彼は、このパースペクティブを折り返して二重化することによって自ら「外部」の視点に立ち、そこからの文化批判の可能性を見いだしていくことになる。彼が1906年に「ハーンはわれわれの世代の道徳的力である。(中略)彼の書物はこの異国の島[日本]によりもわれわれのヨーロッパに向けられている」(SW33, 112)²⁰⁾と述べているのも、そのような意味に解することができるだろう。先に引用した1917年の「境界を越えること」「別な岸辺からの…視線」というハーン評も、その延長線上にある。

こうした外からの視線を明示的に引き受けた語りや、1907年の『帰国者の手紙』における、帰国者による西洋批判という設定である。『日本人との対話』では日本人の口からヨーロッパ批判がなされていたのに対し、ここでは長期在外によって「外部」の目を獲得し帰国したドイツ・オーストリア人ビジネスマンが、現代ドイツを厳しく批判する。『日本人との対話』と同じモットー「全人は一斉に動くべし」が、モンテヴィデオで出会った英国紳士から聞いたものとして提示される。もはや日本への言及はないが、その代わりに非ヨーロッパの各地(広東、

19) 庭、学校、墓地、富士山、武士道、浮世絵など (SW31, 40)。それらのいくつかはハーンのテキストを示唆している。またこれらのイメージの多くは、素材としては19世紀後半の半世紀にわたる西洋の日本趣味が作り上げてきた典型的な像とさほど変わらない。

20) Hugo Heller 書店あて公開書簡。推薦図書アンケートへの回答として、かなりの数の著述家や著作をあげて解説している中に、ハーンの名があげられている。ただしここでは、有名な『心』はやや迎合的だとして、むしろ『東の国から』 *Out of the East. Reveries and Studies in New Japan* を推している。

ウルグアイ、マラヤ) (SW31, 154) で出会った人々の「顔の表情」や「姿勢」が、「全人」として人格的統一を体現していたことが回想される。また、そのような調和の理想に照らして、ドイツ人は「右の手のすることを左の手は知らず」(158)「明澄な響き」(161)を持ち合わせていないという。全一的東洋に対する分裂的西洋への批判が、西欧人の心性と身体に現れる不調和として、また、それにひどくいらだつ主人公自身の身の置き所のなさとして内在化されて描かれている。

ちなみに『日本人との対話』にも日本人や西洋人のしぐさや表情に関する記述がある²¹⁾。また『チャンドス書簡』にも先に述べたように身体イメージへの着目があり、これらは『虚構の対話と書簡』作品集構想に通底するモチーフである、概念言語批判とそれにかわる別様の「未知の言語」希求の枠組みの中にある。同時期のエッセイ『比類なき踊り子』(1906)において、ヨーロッパ人の「徹底的に異質なもの」(SW33, 116)への関心の例として、東洋風の舞踊と、ハーンや岡倉天心の書物が併置されていることも、あわせて示唆しておきたい。

つまり、ホーフマンスタールの「境界を越えること」への願望において、文化的越境は、西洋的言語とそれに拘束された身体性の境界を越えた、新しい表現可能性の模索へと通じているのである。『帰国者の手紙』に照らしてみれば、その第1書簡から第3書簡が帰国者の西洋批判を主題としているのに対し、第4・第5書簡ではゴッホ絵画との出会いによる「見る体験」²²⁾の衝撃が語られている。一見不整合とみえるふたつのテーマは、ホーフマンスタールにとっては、西洋合理主義を超えるという点でひと続きのものなのである。

『帰国者の手紙』に関して注目しておきたいもうひとつの点は、「帰郷」とあわせて「過去とのつながり」というモチーフが導入されていることである。「地理的・文化的な遠方」は、「時間的遠方」に通じると同時に、本来性の場としての「近さ」「家郷」へともたらされる。主人公が非ヨーロッパ圏で出会った「全人」の像は、「過去の場所」すなわち「古きオーストリア」「古きドイツ」(SW31, 162)として、幼年期の記憶、故郷の記憶を呼び覚まし、また、祖父が見せてくれたデューラー銅板画集の「昔のドイツ人」の相貌を思い起こさせる。つまり、幼年期の記憶の中にあるドイツ人の原像を呼び出す。この点にも、ハーンの《ある保守主義者》における帰郷のモチーフとの密かなつながりを見いだすことができるかもしれない。ただし、帰郷のモチーフは『帰国者の手紙』作中で十分には展開されていない。元々の構想では帰郷後の暮らしと、故郷の再発見、故郷との和解が語られるはずだったともいうが、それは書かれずに終わった²³⁾。前述のとおり、作品後半の中心主題が異文化比較から認識言語の問題へとシフトしたためであろう。ハーンとの関連についていえば、「帰郷」と関わる「祖霊」のテーマにホーフマンスタールが取り組むのは、もう少し後の時期になる。

21) たとえば、開港直後の日本人が西洋人を浮世絵のモンスターのようなものと見た、というハーン《ある保守主義者》のエピソードが引かれている。

22) 第4、第5の手紙の雑誌発表時のタイトルは、*Das Erlebnis des Sehens*「見る体験」(*Kunst und Künstler* 誌 1908.2) ないし *Die Farben*「色彩」(*Fischer Almanach* 誌 1911に再録時)だった。

23) Ellen Ritter: *Hugo von Hofmannsthal: »Die Briefe des Zurückgekehrten«*. In: *Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts* (1988), S. 228.

4-3 富士山と祖霊

さて、ここで再びハーン《ある保守主義者》に戻り、その最終場面を見てみよう。ハーンは主人公の経歴と西洋体験を淡々と語った後に、結末の帰国の場面をクローズアップし、真の「保守主義者」の誕生の瞬間を、心を揺さぶるクライマックスとして描いている。

《ある保守主義者》は、この場面に強いアクセントがある。帰国の船が相模湾に入ると乗客たちは朝焼けの富士を見ようと甲板に立つ。水平線に目をこらしてもそれを見つけれない乗客たちに、船員が「もっと上を見なさい！」と声をかける。まなざしをあげると予想よりもはるか上に、雲と霧の中から富士の頂上だけが聳え立っている。

湾から遠望する富士は、奈良時代以来くりかえし和歌に詠まれ、北斎や広重の浮世絵によって西洋にも知れわたった、典型的なニッポンの風景であり、ジャポニズムの代名詞でもある。とはいえこの場面は、いかにも欧米人向けのエキゾチズムの図にはとどまっていない。

既知の浮世絵の風景との再会ではなく、新しい角度に聳える富士を目にした主人公には、「もっと上」が、近代日本国家への、またその一員に帰還した自分への励ましの声と聞こえる。その富士を見つめながら主人公は、故郷の家の祖霊をまつる神棚を思い出し、祖先との結びつきを実感する。彼は「新しい日本」の中に生き続ける「古い日本」の精神のために身を捧げる決意を固めるのである。

ホーフマンスタールの『日本人との対話』覚書には「故郷の山との再会」「富士山」「死者の家」(SW31, 41)といった記述があり、この場面が彼に強い印象を与えたことがわかる。また、この場面は《ある保守主義者》に続く章《業の力》の先取りともなっており、後のホーフマンスタールが強い関心を寄せることになるハーンの「カルマ(業)」や「前世」の概念への導入となっている。加えて、故郷と祖先との再会のモチーフはホーフマンスタール『帰国者の手紙』にもあり、「心の帰郷」の図が、二人のテキストを密かに結びつけているのは、先ほど述べたとおりである。

5 プレエクスステンツ Präexistenz

最後に、ハーンのホーフマンスタールへの影響としてもう一点重要な「前世・前存在」[Präexistenz]の概念に、ごく簡単にふれておきたい²⁴⁾。

ハーンは『心』において、仏教の「前世」や「カルマ」の概念を西洋思想と結びつける解釈を提示したが、ホーフマンスタールが第一次大戦期のハーン再読の際に特に関心を寄せたのはこの点だった。1916年の『スカンジナビア講演のための覚書』には、岡倉天心の『東洋の理想』などとあわせて、ハーン『心』の《業の力》および《前世の観念》からの多くの抜き書きが残されている²⁵⁾。ハーンによると、東洋的な靈魂の概念は、西洋の個人的な靈魂観と異なり、

24) これに関しては、Ritter, Pacheなどが詳述している。Vgl. Ellen Ritter: *Über den Begriff der Präexistenz bei Hugo von Hofmannsthal am Anfang des 20. Jahrhunderts*. In: GRM 22 (1972), S. 197-200; Pache 前掲論文。

25) たとえば《前世の観念》より、「東洋人の自我とは、思考を絶する複雑さを持つ集合体ないし合成体であり、数え切れない幾世もの前世の創造的思考の総計が凝縮されたものなのである」(K, 168f.)。ホーフマンスタールはこの箇所を抜き書きしており、「前世と魂の多数性について言えば、東洋的なものと西洋的なものに真の対立はない」(SW34, 320)と記している。

先祖代々の魂の経験や感情の集合体であり、超個人的なものである。この靈魂観は一見西洋人には奇異なものと思えるが、ハーバード・スペンサーの心理学的進化論とも合致するものだと説明している。ホーフマンスタールは東洋思想と西洋思想をむすぶこの教説に、個人主義を克服する共同体理念へのひとつの通路を見て取り、魅了された。この時期のホーフマンスタールはヨーロッパの危機に対する処方箋をもとめてインド哲学や中国哲学などへの関心を深めていたが、そうした中でハーン流の解釈は、西と東を二項対立で捉えるのではなく、両者を仲介する視点を提供した点で魅力的だった。

一方で、同じ時期に書かれた覚書『自分自身について』 *Ad me ipsum* (1916-) では、「前世・前存在」がホーフマンスタール独自の意味で用いられている。彼は自作の登場人物たちの歩みを「前存在 [Präexistenz]、輝かしいがしかし危険な状態」から出て、「現実存在 [die wirkliche Existenz] への道のり」、「直接的な (神秘的な) 道を経て自己自身に至る (世界に至る)」移行と定式化している (SW37, 140f.)。ひとは宇宙的、超個人的なものとの調和のうちにまどろむ非行動的な「前存在」の状態を脱して、社会の中での行動の原理を手に入れ、より高い自我を確立していかななくてはならないというのである²⁶⁾。とはいえここで「前存在」は否定されるわけではない。むしろ直接的・神秘的な「前存在」と、倫理的・反省的な「存在」の力学の相互補完のうちに、「より高い自我」への歩みがなされるのである。

この構図はハーンのいう仏教的な「前世」とは大きく異なる独自の概念となっている。本稿ではホーフマンスタールの「前存在」概念の複雑な意味領域にこれ以上踏み込むことはできないが、彼がこの概念に惹かれた理由のひとつとして、彼自身の初期作品に見られる、自我と世界の未分化の感覚をあげておきたい。たとえば、初期の詩《僕らは夢とおなじ生地でできている》の結びの句「そして三者は一体だ 人、もの、夢」がうたっている一致の感覚であり、あるいは『チャンドス書簡』の主人公が「危機」以前として説明する以下のような状態である。

当時の私は、一種の持続的な酩酊状態にあって、存在全体がひとつの大きな統一体と見えていました。精神世界と物質世界が対立するとは思えず、(中略) そして全自然のうちに私は私自身を感じていました。(SW33, 47)

ハーンが解説した「前世」は、こうしてホーフマンスタール自身が最初期から熟知していた状態を名指す概念として読み替えられ、自己自身と自作についての省察を深める手がかりとなった。同じひとつの概念が一方では文明論的・政治的考察の文脈で、他方では自らの創作の原理を説き明かすキー概念として取り入れられたことも、ホーフマンスタールのハーン受容が、いかに多面的で生産的なものであったかを示している。

26) パッヘは、この移行について、プレエクシステンツという「自我が自分自身と完全に調和しているが、しかし行動の領域の外にある、自己中心的瞑想の境地」から、「その正反対の状態、人間が無意識に行動へと駆り立てられる自己自身を見いだす状態へ」と要約し、ハーンと異なりホーフマンスタールの場合は「人間の行動とそのモラルに関する教説」になっていると評している (Pache, 459)。

6 結 び

ホーフマンスタールは、古今東西の著作から得た膨大な教養や示唆を咀嚼し、自らの思考のなかに自在に取り込んで熟させていくことに長けた、総合的知性の持ち主であった。本稿でたどってきた彼のハーンの著作との出会い、共感、再読、深化と読替えの過程にも、そうした対話的ともいうべき方法が見て取れる。越境者としてのハーンが「愛する国」日本を見つめるまなざしが、ホーフマンスタールをハーンのテキストとの幾重にもわたる関わりへと導いた。境界を越えて異質なものと身を投じること、心の目で捉えることで異質なものを身近なものへと変容させること、ひるがえって外からの視線で自文化を見つめ直すこと、ホーフマンスタールはそうした異文化との交わりの姿勢をハーンに学んでいる。またホーフマンスタールは、ハーンから受けた示唆を、自身の問題意識や創作原理に沿って翻案した。ハーンにおける地理的・文化的な越境の問題は、ホーフマンスタールにおいては、認識言語の限界や自我の境界線をいかにして踏み越えるかという、彼自身の課題に結びつけられ、それがひるがえって仏教的な概念への関心にもつながっていった。

こうした長い関わりをその始まり以来支えてきたのは、ハーンの著作に対する素朴ともいえる共感だったのではないか。ハーンは、人や物との関わりに働く霊的共感を感じとる能力をもつ人だったと言われているが、彼の著作もそうした「霊的」な引力を発して、読者を引きつける。ハーンの描いた愛らしい「日本」は、ホーフマンスタールにとって、対象との「愛に満ちた」交わりが生み出す理想像の、いわばシンボルだったとも言えよう。

付 記

本稿は2019年10月にオーストリア、ザルツブルク大学で開催されたシンポジウム Japan and Viennese Modernism におけるドイツ語での口頭発表（未公刊）が元になっている。この場を借りてシンポジウム主催者の方々に改めて感謝申し上げる。

（原稿受理日 2023年3月12日）